

研究報告

日本体操祭の再興から発展終結に関する研究

川端 昭夫¹⁾

Restoration, Evolution, and Termination of Japan Gymnastics Festival

Akio KAWABATA

1. 序論

日本体操祭は、第二次世界大戦後昭和29年から昭和43年まで続けられた全国的規模の集団体操（集団演技）の祭典であった。大会は、国民の健康体力づくりを意図して始められたが国民体育デー、スポーツの日など広く国民への体育スポーツ普及を目指した主要行事であった。大会の趣旨は、朝日新聞によれば、「体操の普及、振興のために本社が小、中、高、大学の生徒および一般社会人の参加を得て、昭和10年創設、一時中止していた体操大会をこのたび新しい構想のもとに再開、次のプログラムにより挙行いたします。・・・この「第一回体操祭」は参加範囲を各層に拡大、演技人員も実に一万人を超え、明治神宮外苑競技場一杯に展開さ入れるはつらつたる健康美と秩序ある集団美はまさに一大レクリエーション絵巻たること信じます。・・・」¹⁾（写真1）と報告されており、戦前朝日新聞社主催で全国的に開催された集団体操独自の全国的祭典である日本体操大会復活が意図されたものであった²⁾。

集団体操（集団演技）（以下集団体操）は、国民体育大会や高校総体の開閉開式やスポーツ行事の総合芸術的な要素のある演技（エキジビション）をさすが、日本の集団体操の発祥は戦前と言われており³⁾、大正14年第二回明治神宮

競技大会のマスゲームとされている。（近年では、第6回極東体育大会の式典の集団体操がその起源とも言われている⁴⁾）。昭和5年には全日本体操連盟が創設され、体操・集団体操普及の



写真1 朝日新聞昭和29年11月02日

¹⁾ 中京大学スポーツ科学部

ため、体操祭を全国で実施した。また昭和10年から昭和18年まで朝日新聞社が主催となり、日本体操大会が「国民の体力体位向上と国民精神の作興」を目指して最大で250万人を動員して行われた²⁾。大会では、主に集団体操が実施されたが、「体位向上、国民精神の作興」の意図だけでなく、ラジオ体操や青年体操などの体操普及の場であり、あわせて国民のレクリエーションの場としての意味をもつものであった⁵⁾。戦後の戦前の集団体操の普及・発展の影響が、昭和22年からリズム体操祭として関西地区中心に復活し、昭和29年からは日本体操祭が再開復活されたの背景には全国に拡大されたのは戦前の体操祭、体操や集団体操の復活を求める動きがあったと考えられる。

本研究の目的は、第二次世界大戦後昭和29年から昭和43年まで全国的に実施された朝日新聞社主催の日本体操祭を取り上げ、再興から発展終結までの経緯を明らかにすることを目的とする。

2. 研究手順

研究資料として、文部年報、体操祭に関する研究や論説、大会報告書また朝日新聞などの代表新聞の大会関連記事を参考にした。調査項目としては、以下に示すとうりである。

- (1) 体操祭の創設の趣旨とその変化について、国民体育デー、スポーツの日などとの関連から検討する。
- (2) 体操祭の会場、会場数、参加者数、主催などをもとに大会の全国的な開催状況と大会の変化を検討する。
- (3) 体操祭（特に東京体操祭）を対象に、演技種目、演技対象、演技規模（人数）などから集団体操の変化について検討する。

3. 日本体操祭についての先行研究

体操祭に関する主要論文、論説としては、松本、成瀬、浜田、木下らがあげられる。

松本⁶⁾は「日本体操祭は、昭和29年11月26日、

東京朝日新聞社が主唱し、東京都教育委員会、日本体操協会と共催、文部省、労働、厚生各省、日本放送協会の後援で第1回日本体操祭東京大会として、明治神宮外苑競技場で開催された。この大会が全国的体操大会の口火となり、文部省の共催を得たのち、さらに全国教育委員会、日本体操協会、全国小・中・高体育連盟の共催のもとに、実施されるようになった。従来のリズム体操大会と第1回東京大会を発展的に合同、構想も新しく「日本体操祭」と銘うって、昭和30年から毎年5月第三週日曜日を会期として、全国各と道府県に開催を呼びかけた。・・・その後昭和34年文部省に体育局が新設され体操祭がおこなわれる5月の第3日曜日に国民体育デーが設けられたので、この日は全国的に中心行事となり、ますます盛大におこなわれるようになった。しかし、昭和36年の国民体育デーは、スポーツ振興法の設定で消滅し、新しく10月の第一土曜日スポーツデーがきめられたが、体操の開催日は全国日本体操大会、リズム体操大会の伝統を重んじ、五月の第3日曜日を変更しないで、幕を閉じた昭和43年の第15回大会まで続行された」と日本体操祭について概説している。また、開催の趣旨として、「国民の健康を図るために健康づくりの実践活動をもっと盛んすることが必要であり、日本体操祭は、この健康づくりの実践活動を促進するために、年に一度全各地の団体や職場、事業場、学校などで日頃練習したり、楽しんだりしている体操、ダンス、スポーツなどのレクリエーション活動を実演、披露し、明るく春の太陽のもとに健康を讃え合う体育レクリエーションの祭り、また、健康づくりの祭典で全国民の体位向上に寄与することを目的とした。」と報告している。

また、成瀬⁷⁾は、「戦前」のマスゲームの起こりについて、「昭和初期のチェコの体操祭の影響、マスゲームの機運の高まりの中で、大楠公600年祭を記念して1953年に日本体操大会が創始され、日本のマスゲームが発達してきた」と述べ、また、戦後のマスゲームの歩みとして、「マスゲームの歩みは、第二次大戦の終了と共に切断された形でスポーツに比べて、復活のあ

ゆみが遅かった。・・・戦前行われていた日本体操祭が大阪において新しい構想で行われたり、国民体育大会が、地方もちまわりになり、開会式・閉会式に郷土の紹介をかねてのマスゲームが多く盛り込まれたりして成長して来た。昭和33年にアジア大会が東京で開催された時、エキジビションの中に、34のマスゲームが発表され大きく飛躍の第一歩となった。そして、音楽や色彩にも研究が加えられ、手具を効果的に使用するマスゲームも発表され、個々の人々の技と共に、集団としての美を求め、今日のような発展を遂げたと言われる」と述べている。

浜田⁸⁾は、「マスゲーム独自の大会は、昭和10年（1935年）に始まった日本体操祭が最初である。これは、大楠公600年を記念して朝日新聞の主催で始められたものでマスゲームを対象とした大会であった。・・・戦後「朝日体操祭」という名称で昭和29年（1954）に復活し、毎春国立競技場で行われた・・・」と集団体操独自の大会として日本体操祭を位置づけながら、戦前と戦後の連続性を述べている。

木下⁹⁾は、「日本体操祭と国民体育デー」の中で、第一回日本体操祭の開催を述べ、第六回から「国民体育デー」の中に位置づく大会であり、「国民体育デーは、戦前の大規模な朝日主催体操明治神宮大会の壮観なマスゲームの復活を思わせる」と述べている。さらに、国民体育デーは、1961年秋から「スポーツの日」となり、1966年から10月10日の「体育の日」となるとして、日本体操祭が、戦前の体操祭の連続性や、国民体育デーやスポーツ日と関連させて述べている。

4. 体操祭の創設の趣旨とその変化

体操祭の創設の趣旨は、昭和30年文部年報¹⁰⁾によれば、「体操の普及振興のため学生生徒児童及び一般社会人の参加を得て国内の各地各層に体操の実践を促進し、全国民の体位向上に寄与する」であった。趣旨は、体操の普及振興、各地各層の体操実践、国民の体位向上の三要素である。戦前の日本体操大会の趣旨は、国民の

体位向上と精神作興を目的としており、戦後では、体操普及と実践と体位向上があげられ、時代柄精神作興が削られている。

表1は、体操祭の開催期間である昭和29年から昭和43年までの文部年報（昭和29年は記載なし）に掲載された大会の趣旨と内容を示したものである。表から、昭和30～31年¹⁰⁾¹¹⁾では、体操の普及振興、体操の実践、体位向上が主眼とされ、昭和32・33年で¹²⁾¹³⁾は、体位向上に「レク祭典」が位置づけられる。昭和34・35年¹⁴⁾¹⁵⁾では、ほぼ同様であるが、レク祭典が「体育レク」と名称変更される。昭和36～39年¹⁶⁾¹⁷⁾¹⁸⁾¹⁹⁾では、「体育レク」を通じた体位向上になる。昭和40年²⁰⁾では、体位向上が「健康増進」に変化する。昭和41・42年²¹⁾²²⁾では、「健全なレク」による「心身の健康増進」と「心」が追加されている。昭和43年²³⁾では、「体育の日・スポーツ振興」、「健康と体力の増進」と変化している。15回を数える大会の趣旨の変化は、「体操」から「健康増進」さらに「心身の健康増進」「健康増進」（15回は健康増進と体力の向上）と時代に合わせて変化する。運動手段は、「体操」から「体育レク」さらに「レク」、さらに「スポーツ」と変化をしていることがわかる。

5. 日本体操祭の大会状況と大会の変化

ここでは、体操祭の開催期日、名称、開催会場、総会場数と参加者数について検討する。

大会は、昭和29年第一回から昭和43年第十五回までおこなわれた。名称は、一回から十五回まで「日本体操祭」の名称である。大会日程は、第一回は11月開催であったが、二回以降は5月第3週目日曜日前後に行われた。

大会会場（開催都道府県）は、一回は、東京地区であるが、昭和31年二回から全国に広がり、昭和36年には全都道府県で実施され、十五回まで継続される。全国規模であることは昭和10年創始された日本体操大会と同様である。

主催は、一回は朝日新聞社、東京都教育委員会、日本体操協会である。二回は文部省、全国高等学校体育連盟、各都道府県教育委員会、同

(表1) 文部年報に記載された日本体操祭の趣旨

年 代	文部年報（発行年）	日本体操祭の趣旨
昭和29年	1954 文部省第82年報（昭和32年3月20日）	記載無し
昭和30年	1955 文部省第83年報（昭和32年9月30日）	体操の普及振興のため学生生徒児童及び一般社会人の参加を得て国内の各地各層に体操の実践を促進し全国民の体位向上に寄与する。
昭和31年	1956 文部省第84年報（昭和33年8月25日）	体操の普及振興のため学生生徒児童及び一般社会人の参加を得て国内の各地各層に体操の実践を促進し全国民の体位向上に寄与する。
昭和32年	1957 文部省第85年報（昭和34年3月25日）	体操の実践を通じて全国民の体位向上を念願し、全国各地で一斉に行い国を挙げて一大レクリエーションの祭典とする。
昭和33年	1958 文部省第86年報（昭和35年3月1日）	体操の実践を通じて全国民の体位向上をめざし、国を挙げて一大レクリエーションの祭典とする。
昭和34年	1959 文部省第87年報（昭和36年8月26日）	体操の実践を通じて全国民の体位向上をめざし、国を挙げての体育レクリエーションの祭典たらしめる。
昭和35年	1960 文部省第88年報（昭和37年10月31日）	体操の実践を通じて全国民の体位向上をめざし、国を挙げての体育レクリエーションの祭典たらしめる。
昭和36年	1961 文部省第89年報（昭和38年9月30日）	体育レクリエーションを通じて全国民の体位向上を図る。
昭和37年	1962 文部省第90年報（昭和39年7月10日）	体育レクリエーションを通じて全国民の体位向上を図る。
昭和38年	1963 文部省第91年報（昭和40年3月25日）	体育レクリエーションを通じて全国民の体位向上を図る。
昭和39年	1964 文部省第92年報（昭和41年3月31日）	体育レクリエーションを通じて全国民の体位向上を図る。
昭和40年	1965 文部省第93年報（昭和42年3月31日）	体育レクリエーションの実践によって国民の健康増進を図る。
昭和41年	1966 文部省第94年報（昭和43年3月31日）	国民の各層がそれぞれの体力に応じて行う体操に、リズム運動などの健全な体育レクリエーションの実践によって心身の健康増進を図る。
昭和42年	1967 文部省第95年報（昭和44年7月10日）	国民の各層がそれぞれの体力に応じて行う体操に、リズム運動などの健全な体育レクリエーションの実践によって心身の健康増進を図る。
昭和43年	1968 文部省第96年報（昭和45年7月25日）	「体育の日」の趣旨の普及徹底を図り、あわせてこれを契機として国民がスポーツに親しみ、健康と体力の増強を図る。

小学校体育連盟、日本放送協会などが加わる。三回以降は文部省、日本体操協会、都道府県教育委員会、日本放送協会、朝日新聞社が主体となる。十五回では、全国体育指導者連絡協議会が加えられる。

総会場数と参加者数について、会場数は昭和31年以降大きく増え、昭和33年から急増し、昭和34年210会場、昭和36年280会場となる。昭和37年・38年には僅かに減少するが、昭和40年には最大318会場になる。その後減少し昭和43年・44年には270会場になる。一方、総参加者数は、昭和29年から徐々に増加し、昭和34年から急増し昭和35年には大会中最高の200万人になる。それ以降やや減少するが、昭和36年から再び増加し、昭和38年には第二ピークの160万になり、それ以降減少130万から120万を推移する(第15回120万人)。会場数と参加者数の変

化は、必ずしも一致しないが、昭和33年の国民体育デーをきっかけに会場数も参加者数も最大になり、昭和37年から昭和42年まではスポーツの日となり、参加者数は減少するが昭和39年東京五輪前から会場数は増加し、参加者数も第二ピークを迎える。国民体育デーやスポーツの日などがきっかけになっていることがわかる。

6. 日本体操祭の再興から発展終結までの変化

第一回体操祭（1954年）は、11月6日明治神宮外苑競技場で、主催日本体操協会、都教育委員会、朝日新聞、後援文部省、労働省、日本体育協会、日本放送協会により、東京大会を中心に開催された。

朝日新聞（大会予告）の中で、「体操普及、振興のため本社が小、中、高、大学の生徒および

一般社会人の参加を得て、昭和十年創設、一時中止していた体操大会をこのたび新しい構想のもとに再開、次のプログラムにより挙行いたします。この第一回体操祭は、参加範囲を各層に拡大、演技人員も実に一万名を超え、明治神宮外苑競技場一杯に展開されるはつらつたる健康美と秩序ある集団美は、まさに一大レクリエーション絵巻たることと信じます。」²⁴⁾と大会の趣旨と大会の再開と新しい創設を意図したものであることがわかる。別紙では、『一万余人が参加 若く明るく強く きょう第一回体操祭』の中で「この大会は、昭和十年体操の普及振興のため本社が企画、大阪大会を皮切りに年とともに全国に普及、各会場でいっせいにいき、参加人員も十五、六、七年は二百万、第九回大会の十八年は実に二百五十万を超える文字どおり国民の大会となっていたものである。戦争のため不幸十九年以来中止されていたが今回関係者の三ヶ月に余る構想の下に再開された復活第一回体操祭ともいえるもの。今回の大会は戦前の最盛期に比べると規模は小さいが徐々に全国大会に普及する意図を含んでいる」²⁵⁾として新しい構想による第一回体操祭であり、全国大会への発展する意図を掲げている。写真2

大会では、開会式(式典)と集団演技を行なわれたが、式典の様子は、「開会宣言ののち、ローマで徒手体操優勝の竹本選手の持つ日章旗を先頭に全参加者が入場、ファンファーレの吹奏があり国旗掲揚、本社会長の村山大会名誉会長のあいさつ、文部大臣の祝辞などののち本社機が飛来、花輪を投下して開会式を終わり、若く、明るく、強くというモットーのもと競技場を一杯はつらつとした若人の健康美、集団美を秋空のもと力強く展開する。」²⁵⁾とある。また、「雲一つない秋空さわやかな六日の神宮外苑競技場。本社主催「第一回体操祭」は、日本体操協会東京都教育委員会共催のもと力と健康の躍動する集団絵巻をくり広げた。午後零時半、万を超える参加者がファンファーレとともに・・・開会式が終わって直ちにプログラムに移り中学生千百名がフィールドいっぱいにはがって体操。続いて日本女子体育短期大学生二百余名のダンス

など多彩な演技が次々行われ、三時半の体操祭は大きな感激を残して終わった。」²⁶⁾と報告されている。写真3

二回大会(1955年)は、5月15日(日)、主催に全国高等学校体育連盟・各都道府県教育委員会・同小中学校体育連盟を加え、全国18都道府県において、実施されている。朝日によれば「全国一斉に日本体操祭 来月国民各層の下に」²⁷⁾、『輝く律動美 体操祭 全国に開く』²⁸⁾などと報告されている。写真4

三回大会(1956年)では、「昨年に比べ参加者が三十九都道府県、百六地区にふえました。参加人員は百万人を突破します。国をあげての祭典にふさわしい大会が全国津々浦々に繰り広げられます。」²⁹⁾と大会予告された。大会の状況は、「リズムに躍動する肉体の美を五月の青空の下一ぱいにくりひろげる日本体操祭がきょう十三日全国三十九都道府県(大阪の関西中央大会ほか一部雨天で延期)で花やかに挙行された。文部省、日本体操協会、朝日新聞社共催のこの祭典に今年の参加者は百万人をこえ、一般社会人男女学生から幼稚園児までみんな力一ぱい腕をふり、胸を張り、さわやかな初夏の風の中へのびのびを楽しく体操の一日を過ごした。」³⁰⁾この大会では、日本体操の歌が作られている³¹⁾。

写真5

四回大会(1957年)では、「5月12日(日)全国



写真2 朝日新聞昭和29年11月06日



写真5 朝日新聞昭和31年5月13日「第3回体操祭」

四十四道府県、百三十九会場で一斉に開催されます。参加者も百三十三万人に達し、・・・」³²⁾とさらに主要4会場を中心に会場、参加者数が拡大した。写真6

一回から四回までは、戦後の体操祭が再開され、東京大会から全国への会場と参加者数の拡大が行われた創始期に相当する時期と考えられる。

五回大会（1958年）は国民体育デーの行事、5月11日に全国四十四道府県、参加者百四十万人を集め実施された³³⁾。大会状況は、『花やかに健やかに、全国で体操祭』と題し、「各会場とも幼稚園児のこどもをはじめ小、中、高校、大学生、勤労者、婦人団体、一般社会人などが参加、体操、ダンス、遊技をして明るい集団美を繰りひろげた」³⁴⁾と報告されている。写真7

六回大会（1959年）は、5月17日国民体育デーの開催となり、「今年は開催日が『国民体育デー』、開催地が全国で二百十会場にふえ、百二十六万七千人が参加します。各会場とも幼稚園児、小、中、高、大学生、勤労者、青少年、

婦人団体、一般社会人が集り、体操、体育ダンス、民謡などで一日を楽しくすごし、“国民がそろってスポーツを楽しむ国民体育デー”の中心行事なります。・・・」³⁵⁾と報告されている。朝日新聞によれば、「文部省は、国民体育デーの主要行事を次のように決めた国民体育デーは昨年からスタートしたが、雨と準備不足にたたられて国民からそっぽを向かれた。ことしは、文部省直接のスポーツの祭典を東京・神宮外苑の国立競技場で実施するほか、都道府県でも地方行事を行い国民全部が参加する「スポーツの日」にしたいと呼びかけている」³⁶⁾と報じられた。大会状況は、「150万人の律動美 全国一斉に体操祭」³⁷⁾と報告されている。写真8・9

七回大会（1960年）について、朝日新聞では「十五日（日曜日）は第三回国民体育デー。スポーツとレクリエーションの普及をめざして各地で行事が催されるが、ことしはオリンピック熱で参加者もふえそうだ。中央行事は文部省、朝日新聞社、日本放送協会共催の「日本体操祭」で、二十一団体、約四万六千人が国立競技上で

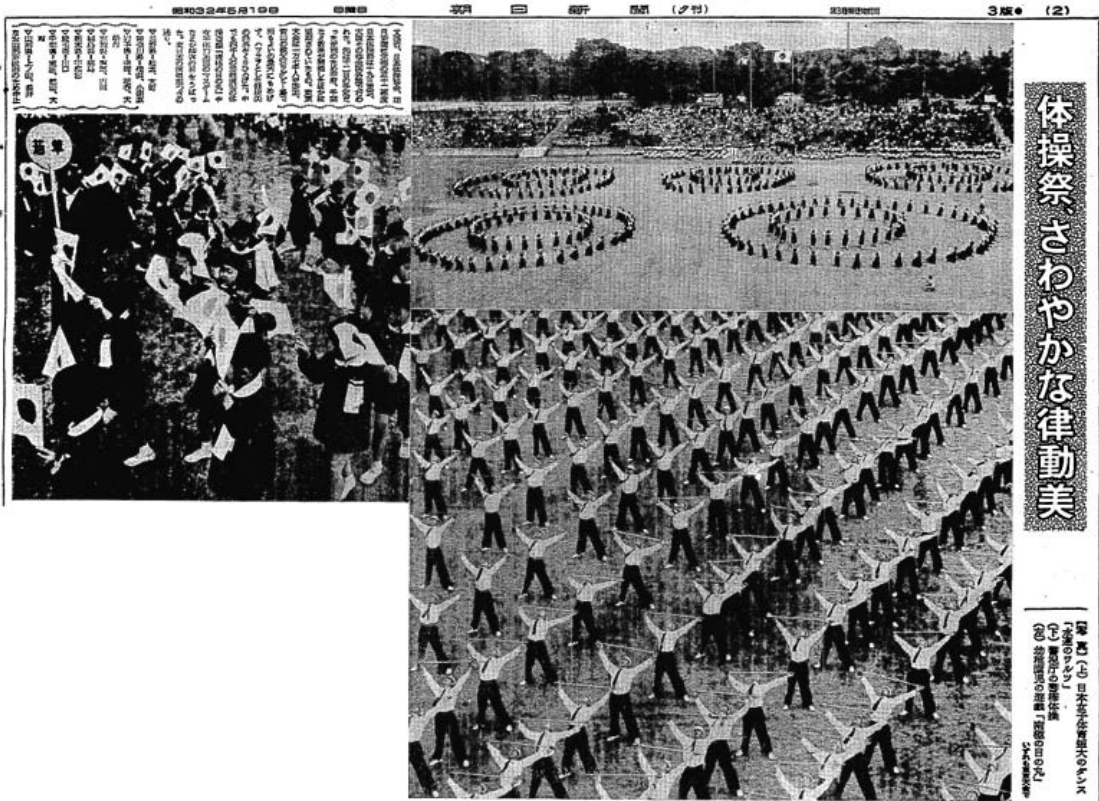


写真6 朝日新聞昭和32年5月19日『第4回体操祭』体操祭、さわやかに律動美

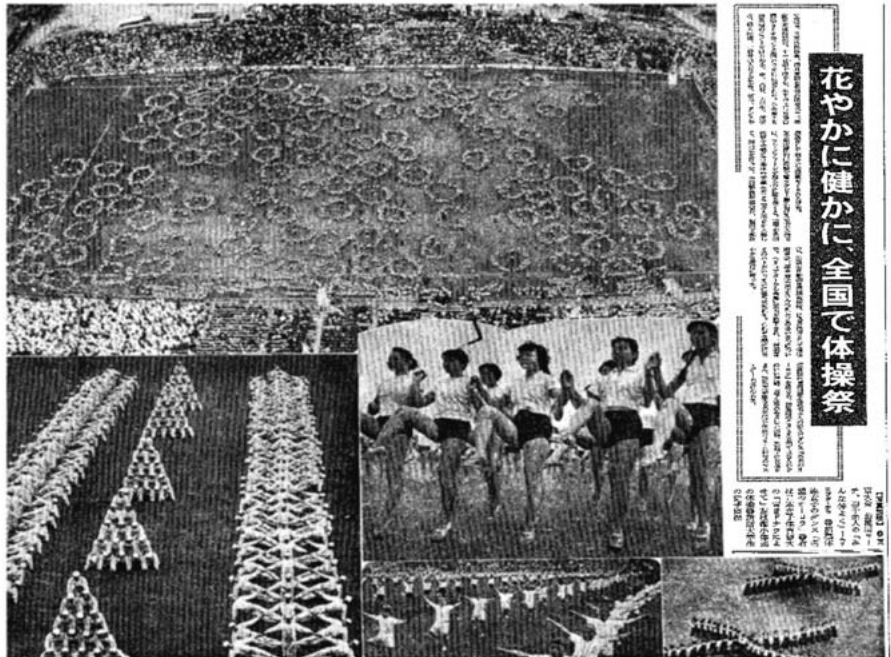


写真7 朝日新聞昭和33年5月11日第5回体操祭『花やかに健やかに、全国で体操祭』

日本体操祭

昭和十四年度の日本体操祭五月十七日(日) 帝心東
 京(昭陽校) 名古屋(鶴橋校) 大阪(天保山校) 九州(白畑市) 各都府県で盛大に開催し、今年
 は開国百周年「国民体育デー」で、開催地が全国
 四百五十都府県に波及し、百五十万人以上が参加
 します。各都府とも幼稚園、小、中、高、大
 学生、勤労者、婦人団体、一般社会人
 が参加し、体操ダンス、器楽など、目録
 表(参考)で、国民体育デーとして平年よりも
 一、二倍の中心行事となります。東日本の開催
 地は次の通りです。

国民体育デーの十七日に

阿、花笠一、大船、花笠(宮城) 仙台、塩釜、青川
 【秋田】 盛岡、大船、本橋、板橋、湯沢、大曲、角館、山
 形、山形、米沢、新庄、飛沢、寒河江、上山、鶴岡、ほろひ
 町、二戸、【福島】 福島、会津坂、平、磐城、【茨城】 一
 村、茨城、水戸、高崎、日立、水戸、吉河、土浦、栃木、
 宇都宮、大田、鹿沼、山崎、【群馬】 群馬、高崎、
 来、伊勢崎、前橋、【埼玉】 さいたま、浦和、川口、川越、蕨、

小笠原、東松山、飯沼、本庄、熊谷、行田、【千葉】 千葉、木
 更菜、館山、船橋、東金、ほろひ町、【東京】 昭陽校、【神
 奈川】 相模、横浜、新横浜、横浜、【静岡】 静岡、静岡、静岡
 田、ほろひ町、【岐阜】 岐阜、岐阜、大府、松本、ほろひ町、
 二村、【西濃】 岐阜、岐阜、ほろひ町、【山梨】 山梨、
 府、富士田、静岡、大月、甲府、山梨、【長野】 ほろひ町、

主催 文部省 開催地教育委員会
 日本体操協会の朝日新聞社

写真 8 朝日新聞昭和34年 5月14日 第6回体操祭

マスゲームをくりひろげる。各地の体操祭も約百五十会場、約二百万人の参加が見込まれている。・・・」と予告している³⁸⁾。写真10

八回大会(1961年)は、5月12日(日)北海道、東京、名古屋、大阪、西部の各大会はじめ、全国四十五都府県で一斉に開催された。朝日新聞では、「この大会は毎年五月の第三日曜に行われる「国民体育デー」の中心行事として年を追って盛んになり、本年は開催地が二百八十余会場、百六十万人以上が参加します。各会場とも幼稚園児、小、中、高、大学生、勤労者、青少年、婦人団体、一般社会人が徒手体操、器械体操、リズム運動、体育ダンス、民謡踊りなどで楽しく一日をすごすぞうというもので、本年は勤労者の参加が多いことが目立ちます。・・・」と勤労者の参加を報じている^{39) 40) 41)}。写真11

五回から八回までの体操祭は、国民体育デーの主要行事に位置づけられた大会で、大会のシステム、主要会場を中心とした会場や参加者数の拡大、参加者も小・中・高・大学などの学校の他、勤労者・青少年・婦人・一般など社会の

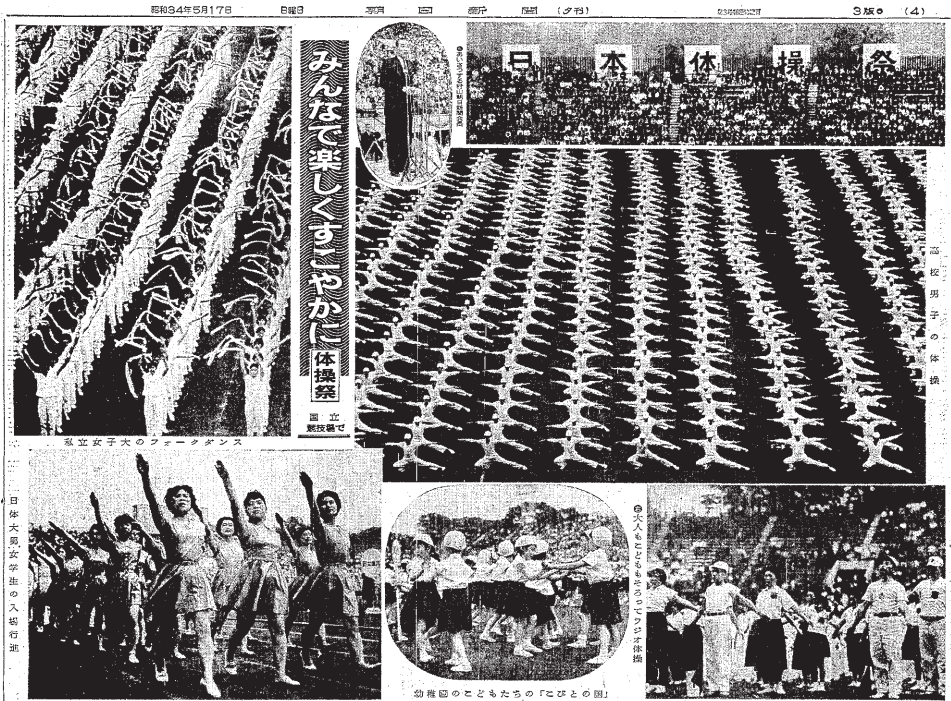


写真 9 朝日新聞昭和34年 5月17日 第6回体操祭『みんなで楽しく健やかに』



写真10 朝日新聞昭和35年5月15日第7回体操祭
『二百万が参加 百会場、律動美』

幅広い階層に呼びかけられた。その意味から発展期とも言えよう。

九回大会(1962年)について、スポーツの日となり「全国四十五都道府県二百六十六会場で計百四十万人が参加して開催されます。各会場とも幼稚園時、小、中、高、大学生、勤労者、青少年、婦人団体、一般社会人など広い層から出場しますが、本年度は各地大会とも規模も内容も一層充実、みどりの季節にふさわしく体操、体育ダンス、民謡踊りなど、とりどりに健康とリズムにあふれた一日をくりひろげます。」⁴²⁾と規模と内容の充実を報じている。大会状況は、朝日では「体操祭には百四十万人以上が参加、力と美のリズムを各地にくりひろげた」^{43) 44)}。写真12

十回大会(1963年)は、大会予告では「全国四十五都道府県二百六十余会場約百五十万が参加して開催され」⁴⁵⁾、朝日新聞では、「さわやかな五月の風に幼稚園児から小、中、高校生、青年、婦人団体団体など新緑映える各会場は健康をよろこぶ笑顔にあふれ、大人も子どもの体育とレクリエーションの一日を楽しんだ」⁴⁶⁾と報告されている。写真13

十一回大会(1964年)について、朝日では「若

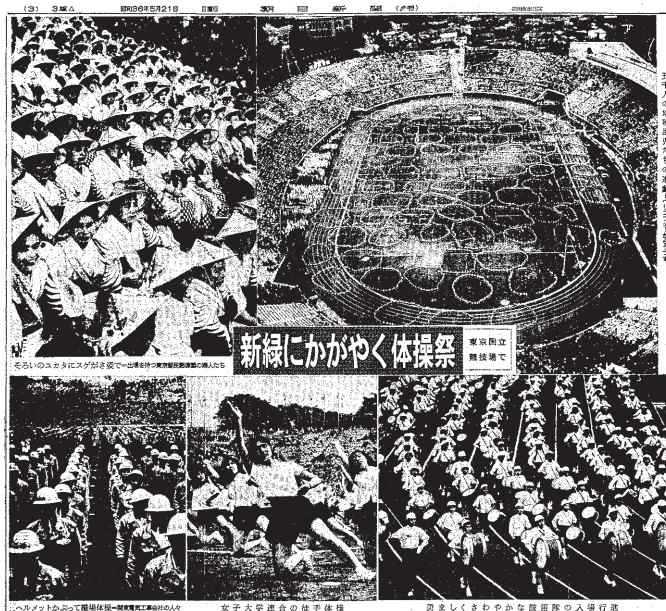


写真11 朝日新聞昭和36年5月21日第8回体操祭『新緑に輝く体操祭』

さと健康の躍動する今年度の「日本体操祭」が文部省、日本体操協会、NHK、朝日新聞社などの主催で十七日を中心に全国各地で行われた。朝から全国的な晴天に恵まれ、北海道の室蘭市中島グラウンド、名古屋市瑞穂競技場、北九州詰絹ヶ谷競技場など二百六十会場に集った若人は約百三十万人さわやかな五月の光と風の下でそれぞれに趣向をこらしてリズム感あふれる催しがあった。関東では、東京はじめ千葉、浦和、川崎、前橋、宇都宮などの各市町村が参加、オリンピックの年にふさわしく「オリンピック大行進」「東京五輪音頭」などでふんいきをあげていた。」⁴⁷⁾と報じられ、東京オリンピックへのムードの高まりが読み取れることができる。写真14

十二回大会（1965年）は、5月16日を中心に北海道（函館陸上競技場）、東京（国立霞ヶ丘競技場）、名古屋（瑞穂競技場）、大阪（藤井寺球場）、北九州（絹ヶ谷競技場）の各大会はじめ、

全国四十五都道府県三百八十会場で約百三十万人が参加して開催される。この体操祭は健全な体育レクリエーションの実践によって国民の健康増進を図るものである」⁴⁸⁾と大会予告され、大会状況は、「文部省、朝日新聞社、NHKなど主催の日本体操祭は、十六日、雨天で延期した西日本の一部の地域を除き北海道、東京、名古屋、北九州など全国約三百の会場で、百三十万人が参加して開かれた。オリンピックをきっかけに、体操への関心が高まったことから、各会場の参加団体は、これまで以上に多く、趣向をこらした催しが目立った」⁴⁹⁾とオリンピックによる体操の関心の高まりや、趣向を凝らした演技が目立ったことを指摘している。写真15

十三回大会（1966年）は、「5月15日を中心に主要会場の他全国四十五都道府県二百八十会場約百二十万人が参加して開催されます。幼稚園児、小、中、高、大学生、勤労者、青少年、婦人団体、一般社会など広く各階層の人々が参加



写真14 朝日新聞昭和39年5月17日（日）第11回体操祭
『緑さわやか躍動美—日本体操祭』



写真15 朝日新聞昭和40年5月17日第12回体操祭『色とり豊かに体操祭全国で百三十万人参加』

し、さわやかな五月の光と風の下で、徒手体操、体育ダンス、器械体操、民謡踊り、フークダンスなど、それぞれ体力に応じた多彩な演技をリズムのにせてくり広げ、健康をたたえようと言うものです⁵⁰⁾ 多彩な演技だけでなく、体力・健康賛美などにも注目している。大会状況は、「踊る豪華な色彩 日本体操祭 全国で百万人が参加」⁵¹⁾、「健康美の躍動 全国で体操祭」と報告されている⁵²⁾。写真16

十四回大会（1967年）は、5月21日（日）全国で250余会場とされ、「初夏を踊る健康美 体操祭、全国で花やかに」と報告された⁵³⁾。写真17

十五回大会（1968年）は、「昭和43年度日本体操祭は、19日を中心に、・・・全国四六都道府県二百七十余会場場で約百二十万が参加して開催しされる。この体操祭国民の健康づくり活動を促進するために、毎年五月の第三日曜を中心に、全国各地の団体や職場、事業所、学校などで練習したり、楽しんだりしている体操、リズム運動、器械運動、ダンス、日本舞踊、フォーダンス、各種のスポーツなど体育レクリエーションの多彩な演技を一場に集まってくりひろ

げ、みんなで健康をたたえようというもので、春の「国民体育の日」として全国的に挙行されるものである」⁵⁴⁾。大会は5月開催が予定されていたが、東京大会が雨で無期延期となり、10月10日体育の日の一部内容を修正の上、再演された^{55) 56)}。写真18・19

7. 日本体操祭（東京大会）における期日、時間、会場、開閉会式、演技内容、参加者、参加者数、演技規模の変遷

ここでは、東京体操祭に限定して、開催期日、時間、会場、演技内容、参加者、参加者数、演技規模をもとに集団体操の変化について検討結果を述べることにする。

1) 期日と時間

一回は、11月6日開催であるが、二回以降は5月第三週の前後に行われた。最終十五回は、五月開催予定であったが、雨天で無期延期となり、新たに体育の日として10月10日に再演された。開催時間は、第一回は、開会式(式典)、集団演技、閉会式を11時30分から15時30分までで行われている。二回以降七回大会までは、およそ10時から15時に、八回以降十五回までは9



写真16 朝日新聞昭和41年5月16日第十三回体操祭『踊る豪華な色彩 日本体操祭全国で百万人が参加』



写真17 朝日新聞昭和42年5月22日第十四回体操祭『緑の風—躍動する3万人』

『体育の日』体操祭

第三回を迎える「体育の日」の中央行事として「体育の日」体操祭を開きます。

△十日午前七時開場、同九時半開始（雨天中止）国立競技場（入場無料）一般参観者は千駄ヶ谷、代々木門からはいつて三ー六番ゲートから。

▽演技（カッコ内は参加人員）
 ○ラジオ体操を中心に全国体操部ラジオ体操会連盟ほか全演技者、参観者の集団

品川区小学校連合（一、〇〇〇）
 ○ポール体操部立女子大学連合（一、五〇〇）
 ○波野遊び（みんなど遊ぼう、輪になって）都立幼稚園協会（三、〇〇〇）
 ○リズム体操部（輪の流れ）国立代々木競技場スポーツ教室（二〇〇）
 ○波野隊、トランペット演奏ドリル部（全日本学校バンド連盟（一、二〇〇））
 ○ダンス（今昔）日本女子体育大学（八〇〇）
 ○馬術（東京おけさ、年若頭）
 ○全国

体操部 日本体育大学（二、〇〇〇）
 ○なわとび体操部 都立体操部（六〇〇）
 ○体方テストの模範演技（表現遊び）波のりこえて、キンコンカン部 都立幼稚園協会（三、〇〇〇）
 ○実習体操部 都立幼稚園協会（二、五〇〇）
 ○体方テストの模範演技（表現遊び）波のりこえて、キンコンカン部 都立幼稚園協会（三、〇〇〇）
 ○実習体操部 都立幼稚園協会（二、五〇〇）
 ○体方テストの模範演技（表現遊び）波のりこえて、キンコンカン部 都立幼稚園協会（三、〇〇〇）
 ○実習体操部 都立幼稚園協会（二、五〇〇）

主催 文部省、国立競技場、東京都教育委員会、NHK、朝日新聞社

写真18 朝日新聞昭和43年10月6日（日）『体育の日 体操祭』

秋空に『体育の日』

東京 体操祭や体力テスト

「秋空に体育の日」は、秋の深まる頃、児童・生徒の健康増進を図るため、全国で実施される。今年も、多くの児童・生徒が参加し、元気な姿を見せている。

この日は、ラジオ体操や、ラジオ体操の音楽に合わせて、児童・生徒が元気な姿を見せている。

また、ラジオ体操の音楽に合わせて、児童・生徒が元気な姿を見せている。



写真19 朝日新聞昭和43年10月10日（木）『秋空に体育の日 体操祭や体力テスト』

時から15時に行われた。

2) 会場

一回から三回までは、明治神宮外苑競技場が会場として活用された。ここは、戦前の日本体操大会の東京会場であった。四回・五回では、青山秩父の宮グビー場、六回から八回は、国立競技場が使用された。ここは、オリンピック前の1958年第3回アジア大会を東京で開催し、そのメイン会場として生まれ変わったものであった。九回は後楽園競輪場、十回は神宮第二球技場が活用されている。後半の十二回から十五回では国立競技場（国立霞ヶ丘競技場）であった。主に、明治神宮外苑の競技場を主会場としており、都合により周辺施設も活用されている。

3) 開会式（式典）

体操祭では、開会式、集団体操、閉会式が行われた。開会式では、入場行進、開会宣言、国旗掲揚、体操協会会長挨拶、朝日新聞社社長挨拶、文部大臣挨拶、選手代表宣誓、飛行機（或いはヘリ）飛来と花束投下、放鳩（風船の放飞）などの手順で行われた。戦前の体操大会とは一部異なるがほぼ同様である。

4) 演技数と演技時間

演技のプログラム数は、11演技から24演技であった。一回は11演技であるが、二・三・四回は14～16演技、五回から十一回では18～19演技（十回は15演技）、十二・十三・十四回は大会中最も多く21・23・24演技になり、最終十五回は、17演技となる。演技の全体時間（開会式含む）は、一回は約4時間、二回から七回では約5時間、八回から十五回では5時間10分から5時間30分（十二回は最長で6時間）であった。

5) 演技（種目）の構成

大会プログラムでは、体操系、ダンス系、その他、組み合わせ演技が行われた。

一回から三回では、体操系が多く、ダンス系、組み合わせの割合が少ない。四回から六回では、体操系が多いが、ダンス系、組み合わせも増えている。七回から八回では演技の割合は同じであるが、その他（吹奏楽、鼓笛バンドパレードなど）などの音楽系の演技が増え、多彩になる。九回から十五回では、ダンス系、体操

系、その他、組み合わせの順になりダンス系に演技が増える。中学・高校生・大学生のダンス、婦人の民謡、フォークダンス連盟によるフォークダンスなど舞踊系の内容が目目される。十五回では、体操系も縄跳び体操、美容体操、棒体操、ボール体操など多彩な内容が生まれ、ダンス系、その他とともに演技が多彩になる。演技は、再開当初では、体操系を体操の普及と体位向上の大会の趣旨のためか体操系が多くを占めるが、五回の国民体育デー以降、レク的な意図から、ダンス系、その他も増え、スポーツの以降では、オリンピックの影響などもあり、演技の質も量も多彩になり、人を呼べる見せる多集団演技への変化を遂げる。また十五回では、全員が参加できるラジオ体操や体力テストの模範演技など大会も演技発表だけでなく、観客も含めた参加型の大会を目指したこともうかがえる。

6) 演技対象

体操祭に参加した演技者は、幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生などの学校関係、と勤労者、青少年、婦人などの一般に分かれた。大会では、二回から十回では、学校関係が概ね三分の二を占め、一般は三分の一の割合であった。大会では、幼稚園児、小学生、中学生、高校生、大学生が主力であり、後半では、大学生の活躍が目だっている。一方、一般では、大会への参加団体は、ラジオ体操協会、民謡連盟、吹奏楽・バンド連盟などの活躍が目立ち、大会により、警視庁、国鉄（鉄道関係）、全産業レクリエーション協会、フォークダンス連盟、日本職業訓練協会、関東電気工事、婦人体操グループなどが見られた。

7) 参加者数と演技規模（一演技の参加者数）

東京体操祭への参加者数については、一回から二回では、1万から1万1千人、三回から七回では2万1千から2万5千人、八回では3万余人、九回から十一回では2万から2万千人、十二回では最大の3万7千人、十三回では約3万人、十四回では3万人（観客は約5万人と充実する）、十五回では2万9千人と後半では3万人近くを維持している。

また、個別演技の参加者数を見ると、大会通

じて、500～1000人、0～500人、1000～1500人の割合が多い。大会別に見ると、一回から三回までは、500～1000人、0～500人、1000～1500人以外に2500～3000人は少数で1500人以下の小規模演技が多い。四回から十一回では、1500人以下に、ごく少数3300人、4000人、4500人、5800人などの大規模演技が特徴である。十二回から十五回までは、1500名以下の演技数が多くなり、併せて2000～2500人、2500～3000人、3000～3500人などの多集団の演技も増える。

大会通じて、1500人以下の演技を基礎にして、演技参加の演技の参加者数を確保し、後半程多集団演技数を増やし、集団体操にふさわしい多数の参加者を確保していた。

8. 結 語

本研究では、日本体操祭の再興から発展終結を取り上げ、研究資料として、体操祭に関する論文書籍、朝日新聞など掲載記事を参考に、大会と趣旨、大会の再興から発展終結までの変化、体操祭（主に東京大会）の開催状況と集団体操の変化について討考察した。本研究の成果は次のようにまとめられた。

第一に、体操祭は、昭和29年第一回から昭和43年第十五回まで、全国最大318会場、参加者数最高200万人を数える集団体操独自の大会であった。大会は、第二次世界大戦前の昭和10年創始された日本体操大会と戦後昭和22年リズム体操祭の影響を受け継ぎ、国民体育大会と同様に、戦後の集団体操（集団演技）の普及発展に影響を与えた大会であった。

第二に、体操祭は、昭和29年に再興後、昭和33年から国民体育デー、昭和37年からスポーツの日の主要行事としての役割を果たした。開催の趣旨は、開催当初「体操の実践による体位向上」が意図されたが、これは「レク祭典」、「体育レクによる体位向上」、後半では、「心身の健康増進」、最終では「スポーツに親しむ、健康体力増進」と変化をしている。

第三に、体操祭は、戦前の日本体操大会と同様に、自らの体操を実践し「行う」場であり、

他者の演技を「見る」場であり、公的・私的な新しい体操の「体験」の場であった。それと同時に、レクリエーションの意味を持っていた。

第四に、体操祭は、開会式（式典）、集団体操、閉会式から構成された（最長約6時間）。集団体操では、体操系演技だけでなく、ダンス系、その他（音楽など）、組み合わせなどの演技が行われたが、再開当初は、体操系演技が多く、大会が進むにつれて、特に後半では、ダンス系やその他の割合も増え、多彩さと豪華さを加え、多集団による演技も増える中で、見るスポーツ祭典にふさわしい発展を遂げた。

今回の研究では、代表紙である朝日新聞の掲載記事を主な参考資料として検討をすすめた。概ね大会の全体像を掴むことはできたが、まだ、日本体操祭の主要会場の全てを扱うことができず今後の課題としたい。また、戦後の集団体操（集団演技）の流れを追う上で、まだ昭和22年からのリズム体操祭との関連性や、昭和43年日本体操祭が終結後の国民体育大会、高等学校総合体育大会などへの影響については未解決な部分が残されており今後の課題としたい。

本研究は2017年度中京大学体育研究所の共同研究費を得て行われた。

参考文献

- 1) 朝日新聞昭和29年11月3日『第一回体操祭』
- 2) 川端昭夫、木村吉次 (2013)、「大楠公六百年祭体操大会の創始と日本体操大会への移行」、体育史研究 (30) P.19-39
- 3) 今村嘉雄 (1970)、「日本体育史」、不昧堂、P.612
- 4) 木下秀明 (2015)、「体操の近代日本史」、不昧堂、p.154
- 5) 川端昭夫・木村吉次 (2016) 「日本体操大会の展開とその体育史的意義」、中京大学体育研究所紀要 (30) P.23-43
- 6) 松本民子 (1984) 「日本体操祭と戸倉ハル作品によるマスゲームについて」日本女子体育大学紀要第14巻 P.61-72
- 7) 成瀬京子 (1974) 「本学におけるマスゲームの変遷」日本女子体育大学紀要4巻 P.41-

- 51
- 8) 浜田靖一(1998)「イラストと写真で見るマ
スゲーム」(第二章日本のマスゲーム略史)
P.251-253
- 9) 木下秀明(2015)「体操の近代日本史」、不
昧堂、p.154
- 10) 文部年報「昭和30年度日本体操祭」文部省
第83年報(昭和32年9月30日)
- 11) 文部年報「昭和31年度日本体操祭」文部省
第84年報(昭和33年8月25日)
- 12) 文部年報「昭和32年度日本体操祭」文部省
第85年報(昭和34年3月25日)
- 13) 文部年報「昭和33年度日本体操祭」文部省
第86年報(昭和35年3月1日)
- 14) 文部年報「昭和34年度日本体操祭」文部省
第87年報(昭和36年8月26日)
- 15) 文部年報「昭和35年度日本体操祭」文部省
第88年報(昭和37年10月31日)
- 16) 文部年報「昭和36年度日本体操祭」文部省
第89年報(昭和38年9月30日)
- 17) 文部年報「昭和37年度日本体操祭」文部省
第90年報(昭和39年7月10日)
- 18) 文部年報「昭和38年度日本体操祭」文部省
第91年報(昭和40年3月25日)
- 19) 文部年報「昭和39年度日本体操祭」文部省
第92年報(昭和41年3月31日)
- 20) 文部年報「昭和40年度日本体操祭」文部省
第93年報(昭和42年3月31日)
- 21) 文部年報「昭和41年度日本体操祭」文部省
第94年報(昭和43年3月31日)
- 22) 文部年報「昭和42年度日本体操祭」文部省
第95年報(昭和44年7月10日)
- 23) 文部年報「昭和43年度日本体操祭」文部省
第96年報(昭和45年7月25日)
- 24) 朝日新聞昭和29年11月3日『第一回体操祭』
- 25) 朝日新聞昭和29年11月6日『一万余人が
参加 若く明るく強く きょう第一回体操
祭』
- 26) 朝日新聞昭和29年11月6日『第一回体操祭
外苑に躍動する健康美』
- 27) 朝日新聞昭和30年4月11日『全国一斉に日
本体操祭 来月国民各層の下に』
- 28) 朝日新聞昭和30年5月15日『輝く律動美
体操祭 全国に開く』
- 29) 朝日新聞昭和31年5月11日『昭和31年度日
本体操祭 参加百万人超す』
- 30) 朝日新聞昭和31年5月13日『競う律動美全
国で体操祭』
- 31) 朝日新聞昭和31年3月14日 日本体操祭歌
決定
- 32) 朝日新聞昭和33年5月9日 日本体操祭東
京大会
- 33) 朝日新聞昭和33年5月10日『昭和33年度日
本体操祭 参加者百四十万人 あす全国百
四十八会場で』
- 34) 朝日新聞昭和33年5月11日『はなやかに健
やかに、全国で体操祭』
- 35) 朝日新聞昭和34年5月14日『日本体操祭国
民体育デーの十七日に』
- 36) 朝日新聞昭和34年5月5日『体操祭・表彰
など一今月第三日曜一 国民体育デー行事
きまる』
- 37) 朝日新聞昭和34年5月17日『150万人の律
動美 全国一斉に体操祭』
- 38) 朝日新聞昭和35年5月5日『15日は国民体
育デー 体操祭へ二百余万人参加』
- 39) 朝日昭和36年5月11日『日本体操祭 国民
体育デーの21日に開催』
- 40) 朝日新聞昭和36年5月21日『160万人が参
加して「日本体操祭」全国一斉に』
- 41) 朝日新聞昭和36年5月21日『新緑に輝く体
操祭』
- 42) 朝日新聞昭和37年5月7日『日本体操祭
20日を中心に二百六十六会場で』
- 43) 朝日新聞昭和37年5月20日『日本体操祭
百数十万人が参加 全国一斉に力の演技』
- 44) 朝日新聞昭和37年5月20日『五月のリズ
ム・日本体操祭』
- 45) 朝日新聞昭和38年5月4日『日本体操祭
19日を中心に260余会場で』
- 46) 朝日新聞昭和38年5月19日健康な笑顔いっ
ぱい 全国で百六十六万人が楽しむ』
- 47) 朝日新聞昭和39年5月17日『緑さわやか躍
動美—日本体操祭—』

- 48) 朝日新聞昭和40年5月1日『日本体操祭
十六日を中心に三百十八会場で』
- 49) 朝日新聞昭和40年5月17日「色とり豊かに
体操祭 全国で百三十万人参加」
- 50) 朝日新聞昭和41年5月8日『日本体操祭
十五日を中心に全国で』
- 51) 朝日新聞昭和41年5月16日『健康美の躍動
全国で体操祭』
- 52) 朝日新聞昭和41年5月16日『踊る豪華な色
彩 日本体操祭 全国で百万が参加』
- 53) 朝日新聞昭和42年5月22日『緑の風一躍動
する3万人 日本体操祭東京大会』
- 54) 朝日新聞昭和43年5月7日『日本体操祭
19日を中心に二百七十余会場で』
- 55) 朝日新聞昭和43年10月6日(日)『体育の
日 体操祭』
- 56) 朝日新聞昭和43年10月10日(木)『秋空に
体育の日 体操祭や体力テスト』